

各関係機関の長  
各病虫害防除員 殿

宮崎県病虫害防除・肥料検査センター所長

平成 2 4 年度病虫害発生予報第 8 号について  
平成 2 4 年度病虫害発生予報第 8 号を発表したので送付します。

## 平成 2 4 年度病虫害発生予報第 8 号

向こう 1 か月間における農作物の主な病虫害の発生動向は、次のように予想されます。

### 発生予報の概要

作物名	病虫害名	発生量の 平年比	記載 ページ
施設果菜類	1 病害一般		2
冬春きゅうり	1 ベと病	やや少	2
	2 うどんこ病	やや少	2
	3 褐斑病	やや少	2
	4 黄化えそ病 (MYSV)		3
	5 ミナミキイロアザミウマ	やや少	3
	6 病虫害全般 (改植時の留意点)		3
冬春ピーマン	1 斑点病	並	4
	2 うどんこ病	並	4
	3 菌核病	並	4
	4 黒枯病	前年、前々年より少ない	4
	5 アザミウマ類	やや多	4
冬春トマト	1 葉かび病	やや多	5
	2 青枯病	やや多	5
	3 トマト黄化葉巻病 (TYLCV)	前年より少ない	5
	4 タバココナジラミ類	並	5
	5 ハモグリバエ類	やや少	6
冬春いちご	1 うどんこ病	やや多	6
	2 炭疽病	並	6
	3 ハダニ類	やや多	6
	4 アブラムシ類	並	6
かんきつ類 (露地栽培)	1 ミカンハダニ	やや少	7
茶	1 カンザワハダニ	やや多	7

は防除情報を発表

### 作物の生育状況 (11月中旬)

11月中旬の冬春きゅうりは生育初期～収穫初期、冬春ピーマンは収穫期、冬春トマトは収穫前～初期、冬春いちごは収穫前、うんしゅうみかんはほぼ収穫終了、日向夏は果実肥大期、茶は秋整枝後であった。

### 向こう1か月の気象予報

天気は数日の周期で変わり、平年に比べ晴れの日が少なく、気温は低い確率50%、降水量は平年並または多い確率ともに40%、日照時間は平年並または少ない確率ともに40%と予想されています。

(1 か月予報 鹿児島地方気象台11月23日発表)

## 発生予報の根拠および防除対策

### 施設果菜類

#### 1 病害一般

[ 防除上の注意 ]

- ( 1 ) 気温の変化等には細心の注意を払い、施設内の温湿度管理を徹底する。特に、コスト低減のため、ハウスサイドや内ホロを多層・多重被覆にしているところでは、施設内が多湿になりやすく、病害の発生が助長される傾向があるので注意する。
- ( 2 ) 多発してからは防除効果が劣るので、初期防除を徹底する。
- ( 3 ) きゅうり、ピーマンについては、10月以降の好天により11月中旬までの収穫量が多い状況であるため、今後成り疲れによる草勢低下から各種病害の発生が懸念されるので、適正な肥培管理による草勢の維持に努める。

きゅうり：べと病、褐斑病、灰色かび病、菌核病、斑点細菌病など

ピーマン：灰色かび病、菌核病、斑点病、黒枯病など

トマト：疫病、灰色かび病、菌核病、葉かび病、すすかび病など

### 冬春きゅうり

#### 1 ベと病 ( やや少 )

[ 予報の根拠 ]

- ( 1 ) 11月中旬の巡回調査における発生面積率20.0% ( 平年22.6% ) は平年並、発病葉率0.3% ( 平年1.9% ) は平年より少である。

[ 防除上の注意 ]

- ( 1 ) 湿度が高いときに多発しやすく、多発すると防除が困難となるので予防散布に重点をおき、発生が見られたら初期防除を徹底する。
- ( 2 ) 窒素切れや草勢の衰えは発生を助長するので、肥料切れしないように適正な肥培管理に努める。

#### 2 うどんこ病 ( やや少 )

[ 予報の根拠 ]

- ( 1 ) 11月中旬の発生面積率35.0% ( 平年46.9% ) は平年よりやや少、発病葉率0.9% ( 平年4.4% ) は平年より少である。

[ 防除上の注意 ]

- ( 1 ) 病勢が進展してからでは防除効果が低くなるので、発病を確認したら早めに防除する。
- ( 2 ) 薬剤耐性菌が出現しやすいので、同一系統薬剤の連続散布は避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。
- ( 3 ) 乾燥時に多発するので、ほ場が過乾燥にならないように管理に注意する。

#### 3 褐斑病 ( やや少 )

[ 予報の根拠 ]

- ( 1 ) 11月中旬の巡回調査では、20ほ場のうち1ほ場で微発生<sup>(注)</sup>(発病葉率0.5%未満)を確認しており、発生面積率0.0% ( 平年4.7% ) 及び発病葉率0.0% ( 平年0.4% ) はいずれも平年よりやや少である。

[ 防除上の注意 ]

- ( 1 ) 多発してからの防除は困難なので、初期防除を徹底する。
- ( 2 ) 窒素質肥料の多用は発病を助長するが、逆に少ないと草勢の低下を招くので、適正な肥培管理に努める。
- ( 3 ) 下位の老化した発病葉は、ほ場外に持ち出し処分する。

#### 4 黄化えそ病 (MYSV)

[ 防除上の注意 ]

- ( 1 ) 本病が一部の施設栽培で確認され、今後感染の拡大が懸念されるため嚴重な警戒が必要である。
- ( 2 ) 本病はミナミキイロアザミウマによって永続的に伝搬されるため、発生後は急激には場内外に蔓延する恐れがある。ミナミキイロアザミウマの防除対策については、次項を参照のこと。
- ( 3 ) 感染株を確認した場合は、速やかに罹病株を抜き取り、ビニール袋等に入れては場外に持ち出し、埋却処分するか完全に枯れるまで密封処理する。
- ( 4 ) 本病と疑われる症状が発生した場合は、西臼杵支庁・農林振興局 ( 農業改良普及センター ) または病害虫防除・肥料検査センターまで連絡する。
- ( 5 ) 改植時には、後述「 6 病害虫全般 ( 改植時の留意点 ) 」を参照のこと。

#### 5 ミナミキイロアザミウマ ( やや少 )

[ 予報の根拠 ]

- ( 1 ) 11月中旬の発生面積率5.0% ( 平年20.4% )、100葉当たり虫数0.1頭 ( 平年3.8頭 ) はいずれも平年よりやや少である。

[ 防除上の注意 ]

- ( 1 ) 本虫は、黄化えそ病を媒介するので早期発見に努め、防除の徹底に努める。
- ( 2 ) 最近、本虫に対し各種薬剤の感受性低下が確認されているため、同一系統薬剤の連用は極力避け、ローテーション散布を心がけるとともに、多発してからでは防除が難しくなるので、低密度のうちに防除する。
- ( 3 ) 施設内では卵・幼虫・蛹・成虫が混在しており、卵と蛹には防除効果が低いので、最少でも7日間隔で3回の連続防除を行い、多発しているときはさらに連続した防除を徹底する。
- ( 4 ) 施設サイド及び谷部に0.4mm目合いの防虫ネットを設置するとともに、施設周囲に光反射資材 ( 少なくとも70cm幅以上 ) を設置し、施設への本虫侵入を抑制する。  
なお、光反射資材は種類によって防除効果が異なるので、関係機関に問い合わせる。
- ( 5 ) 有色粘着板による成虫の捕殺や、土中・地表面での蛹化を防止するためのマルチ被覆など、総合的な防除対策を講じる。
- ( 6 ) 施設内及びほ場周囲の除草を徹底し、本虫の生息・増殖を抑制する。
- ( 7 ) 残さはハウス外に持ち出し埋却する。やむを得ず埋却できない場合は、残さをビニールで完全に覆い本虫の拡散を防止する。いずれの場合も処分地周囲に粘着板を設置する。

#### 6 病害虫全般 ( 改植時の留意点 )

[ 防除上の注意 ]

- ( 1 ) ウイルス病を媒介するコナジラミ類やミナミキイロアザミウマに対しては、以下のことに留意し、次作の発生源を絶つように努める。  
前作きゅうりの栽培を終了する前に、殺虫剤を7日間隔で3回散布する。  
栽培を終えたら、ハウス内の除草を徹底するとともにきゅうりを完全に抜根する。  
抜根後約20日間蒸し込む。  
蒸し込み期間中は、有色粘着板を設置し成虫を捕殺する。  
後作きゅうりの定植時には、必ず粒剤を施用する。
- ( 2 ) 前作に褐斑病などの発生があった場合には特に注意し、定植後直ちに予防防除し感染を防ぐ。
- ( 3 ) 苗の購入の際は、病害虫の発生状況を十分確認する。特にミナミキイロアザミウマが寄生していたり被害痕が多い苗は避けるとともに、ウイルス病の発生が疑われるときは直ちに株を破棄する。  
また、農薬の散布履歴を確認し、育苗期に粒剤の使用がない場合は直ちに施用す

る。

## 冬春ピーマン

### 1 斑点病（並）

[ 予報の根拠 ]

( 1 ) 11月中旬の巡回調査における発生面積率15.4%（ 平 年 14.8% ）は 平 年 並、 発 病 葉 率 0.3%（ 平 年 0.3% ）は 平 年 より や や 多 である。

[ 防除上の注意 ]

( 1 ) 多湿条件で発生した場合、被害が大きくなるので除湿に努める。  
( 2 ) 病原菌が侵入した後の防除では、効果が低いので予防散布を行う。

### 2 うどんこ病（並）

[ 予報の根拠 ]

( 1 ) 11月中旬の発生面積率30.8%（ 平 年 43.0% ）は 平 年 並、 発 病 葉 率 0.9%（ 平 年 3.9% ）は 平 年 より や や 少 である。

[ 防除上の注意 ]

( 1 ) 乾燥した条件で発生しやすいので、過乾燥に注意する。  
( 2 ) 病勢が進展してからでは防除効果が低いので、早期発見に努め、発病を確認したら早めに防除する。

### 3 菌核病（並）

( 1 ) 11月中旬の巡回調査では、発生未確認であり、発生面積率0.0%（ 平 年 6.2% ）及 び 発 病 株 率 0.0%（ 平 年 0.1% ）は い ず れ も 平 年 並 である。

[ 防除上の注意 ]

( 1 ) ほ場内が多湿にならないように換気に努め、排水を良好にするとともにマルチなどを行う。  
( 2 ) 被害茎葉、果実は伝染源となるので、ほ場外に持ち出し適切に処分する。

### 4 黒枯病（前年、前々年より少ない）

[ 予報の根拠 ]

( 1 ) 11月中旬の巡回調査では、13ほ場のうち1ほ場で微発生<sup>(注)</sup>（ 発 病 葉 率 0.5% 未 満 ）を 確 認 して あり、 発 生 面 積 率 0.0%（ H23 21.4%、 H22 14.3% ）及 び 発 病 葉 率 0.0%（ H23 1.2%、 H22 1.1% ）は い ず れ も 前 年、 前 々 年 より 少 ない。

[ 防除上の注意 ]

( 1 ) ほ場内が多湿にならないように換気に努め、排水を良好にするとともにマルチなどを行う。  
( 2 ) 多発してからでは防除効果が上がりにくいので、予防・初期防除に重点をおく。  
( 3 ) 被害茎葉、果実は伝染源となるので、ほ場外に持ち出し適切に処分する。

### 5 アザミウマ類（やや多）

平成24年度病害虫防除情報第10号（11月27日発表）参照

[ 予報の根拠 ]

( 1 ) 11月中旬のミナミキイロアザミウマの発生面積率69.2%（ 平 年 51.2% ）は 平 年 より や や 多、 10花 当 たり 寄 生 虫 数 2.3頭（ 平 年 2.5頭 ）は 平 年 並 である。

( 2 ) ヒラズハナアザミウマの発生面積率84.7%（ 平 年 30.1% ）、 10花 当 たり 寄 生 虫 数 13.5頭（ 平 年 2.3頭 ）は い ず れ も 平 年 より 多 である。

[ 防除上の注意 ]

( 1 ) ミナミキイロアザミウマの成虫が10花当たり1頭程度寄生すると、販売等級格下げとなる果実が5%発生するので、発見したら早めに防除する。  
( 2 ) ミナミキイロアザミウマに対し天敵による防除を実施している施設において、ヒラズハナアザミウマの発生が多い傾向にあり、生息密度が高まると被害が発生する

ので注意が必要である。

- (3) 両アザミウマの薬剤感受性は異なるので、農薬の選定には留意する。
- (4) ミナミキイロアザミウマについてのその他の注意事項については、きゅうりのミナミキイロアザミウマ(3ページ)を参照のこと。

## 冬春トマト

### 1 葉かび病 (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 11月中旬の巡回調査における発生面積率9.1%(平年1.9%)は平年よりやや多、発病葉率0.18%(平年0.02%)は平年より多である。

[防除上の注意]

- (1) 多湿条件で発生しやすいので、ハウスの換気を良くする。
- (2) 発病初期の防除を徹底する。

### 2 青枯病 (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 11月中旬の発生面積率9.1%(平年8.3%)は平年並、発病株率1.8%(平年0.3%)は平年より多である。

[防除上の注意]

- (1) 本病は芽かきなどの管理作業で伝搬しやすいので、発病株を確認した場合は隣接する株も含め速やかに抜き取り、ほ場外に持ち出し焼却する等適切に処分する。
- (2) 発生した畝のわき芽整理等の管理は最後に行う。
- (3) 土壌水分が多いと多発しやすいので、適切な水管理に努める。

### 3 トマト黄化葉巻病(TYLCV) (前年より少ない)

[予報の根拠]

- (1) 11月中旬の巡回調査では、発生未確認であり、発生面積率0.0%(H23 25.0%、H22 0.0%)、発病株率0.0%(H23 0.3%、H22 0.0%)はいずれも前年より少ない。

[防除上の注意]

- (1) タバココナジラミ類の防除を徹底する。防除対策については次項を参照のこと。
- (2) 発病株は伝染源になるので根ごと抜き取り、土中に埋めるかビニル袋に入れて枯れるまで密閉する。ウイルスは植物全体に存在しているので発病部位を除去しても伝染源になるため、必ず株全体を除去する。

### 4 タバココナジラミ類(ハ<sup>・</sup>イ<sup>・</sup>イ<sup>・</sup>イ<sup>・</sup>イ<sup>・</sup>Q<sup>・</sup>B(シ<sup>・</sup>ル<sup>・</sup>ハ<sup>・</sup>-リ<sup>・</sup>フ<sup>・</sup>コ<sup>・</sup>ナ<sup>・</sup>ジ<sup>・</sup>ラ<sup>・</sup>ミ)、ハ<sup>・</sup>イ<sup>・</sup>イ<sup>・</sup>イ<sup>・</sup>イ<sup>・</sup>Q<sup>・</sup>) (並)

[予報の根拠]

- (1) 11月中旬の発生面積率45.5%(平年50.0%)、100葉当たり虫数2.9頭(平年3.9頭)はいずれも平年並である。

[防除上の注意]

- (1) 施設開口部に防虫ネット(0.4mm目以下)を必ず設置するとともに、光反射マルチや近紫外線カットフィルム等の物理的防除手段を利用する。
- (2) 黄色粘着トラップ等を設置し、タバココナジラミ類の早期発見に努めるとともに、栽培期間を通して防除を徹底し、本虫の密度を抑制する。
- (3) 効果のある殺虫剤が少ないことから発見したら早めに防除し、薬剤散布後は防除効果に注意を払い、必要に応じて適宜追加防除を行う。
- (4) 施設内外の雑草はコナジラミ類の寄主となるので除草を徹底する。また、施設内では栽培目的以外の不要な作物や観葉植物等は栽培しない。
- (5) 有効な薬剤に対する抵抗性の発現を回避する観点から、同一系統薬剤の連用は極力避け、ローテーション散布を心がける。また、抵抗性発現の可能性が低い微生物農薬やコナジラミ類を物理的に窒息死させる気門封鎖剤を防除体系に組み込む。

## 5 ハモグリバエ類（やや少）

[ 予報の根拠 ]

( 1 ) 11月中旬の発生面積率9.1%（ 平 年 29.0% ）、寄生葉率0.1%（ 平 年 1.6% ）はいずれも平年よりやや少である。

[ 防除上の注意 ]

( 1 ) 多発してからの防除は効果が低いので、初期防除に努める。

## 冬春いちご

### 1 うどんこ病（やや多）

[ 予報の根拠 ]

( 1 ) 11月中旬の巡回調査における発生面積率38.5%（ 平 年 36.9% ）、発病葉率6.0%（ 平 年 6.0% ）はいずれも平年並である。

( 2 ) 育苗期の天候不順により、株の生育が悪く不揃いなため、今後の草勢の低下にともない発病が懸念される。

[ 防除上の注意 ]

( 1 ) 葉裏に発生しやすいので、早期発見に努め初期防除を徹底する。

( 2 ) 多発すると防除効果が低くなるので予防に重点をおき、発病後は散布間隔を短くするなど発病初期の防除を徹底する。

( 3 ) 発病果など被害部は伝染源になるので、早めに取り除きほ場内に放置しない。

( 4 ) ほ場内の生育状況に注意し、適正な肥培管理による草勢の維持に努める。

### 2 炭疽病（並）

[ 予報の根拠 ]

( 1 ) 11月中旬の発生面積率7.7%（ 平 年 12.4% ）は平年並、発病株率0.1%（ 平 年 0.5% ）は平年よりやや少である。

[ 防除上の注意 ]

( 1 ) 多湿にならないよう、ほ場の排水対策を十分行う。

( 2 ) 発病した株は早期に除去し、新たな感染を防止する。

( 3 ) 次作の親株には、炭疽病及び萎黄病の未発生ほ場からの苗を用意する。

### 3 ハダニ類（やや多）

[ 予報の根拠 ]

( 1 ) 11月中旬の発生面積率53.9%（ 平 年 35.9% ）、寄生株率13.7%（ 平 年 9.1% ）はいずれも平年よりやや多である。

[ 防除上の注意 ]

( 1 ) 収穫期に入り、寄生数が増加してからの防除は困難なので、低密度時から防除を徹底する。

( 2 ) 株整理後、葉数が少なくなった時期に薬剤散布を行うと防除効果が高くなる。茎葉繁茂時には散布圧を強めて、葉裏に良くかかるように散布する。

( 3 ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のロ - テ - ション散布を実施する。

### 4 アブラムシ類（並）

[ 予報の根拠 ]

( 1 ) 11月中旬の発生面積率38.5%（ 平 年 32.8% ）は平年並、寄生株率6.3%（ 平 年 3.6% ）は平年よりやや多である。

[ 防除上の注意 ]

( 1 ) 開花期に薬剤を使用する場合は十分注意し、ミツバチに影響の少ない薬剤を寄生株とその周辺に部分散布する。

- ( 2 ) 株整理後、葉数が少なくなった時期に薬剤散布を行うと防除効果が高くなる。茎葉繁茂時には散布圧を強めて、葉裏に良くかかるように散布する。

### かんきつ類(露地栽培)

#### 1 ミカンハダニ ( やや少 )

[ 予報の根拠 ]

- ( 1 ) 11月中旬の巡回調査における発生面積率31.3% ( 平年51.5% )、寄生葉率1.9% ( 平年12.7% )はいずれも平年より少である。

[ 防除上の注意 ]

- ( 1 ) 冬季のマシン油乳剤の防除効果は高いので実施する。

### 茶

#### 1 カンザワハダニ ( やや多 )

[ 予報の根拠 ]

- ( 1 ) 11月中旬の巡回調査における発生面積率46.2% ( 平年34.8% )、寄生葉率3.8% ( 平年1.9% )はいずれも平年よりやや多である。

[ 防除上の注意 ]

- ( 1 ) 冬季のマシン油乳剤の防除効果は高いので実施する。

- ( 注 ) 微発生とは、病気の発生や害虫の生息は確認されるが、発生面積として換算する基準値に達しない密度の発生状況をいう。

#### その他

- 1 農薬適用の有無などについては次のホームページで確認する。

宮崎県農薬安全使用啓発ホームページ

<http://nouyaku-tekisei.pref.miyazaki.lg.jp/nouyaku/user/top/miyazaki>

日本植物防疫協会ホームページ <http://jppn.ne.jp>

農林水産省ホームページ <http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/>

農林水産消費安全技術センターホームページ

<http://www.acis.famic.go.jp/>

- 2 農薬の使用に当たっては、農薬使用基準の遵守並びに危被害の発生防止に努める。

- 3 発生量(程度)の区分

多	い	( 高	い )	やや多いの外側 10% の度数の入る幅
やや多	い	( やや高	い )	平年並の外側 20% の度数の入る幅
平年並				平年値を中心として 40% の度数の入る幅
やや少	ない	( やや低	い )	平年並の外側 20% の度数の入る幅
少	ない	( 低	い )	やや少ないの外側 10% の度数の入る幅 ( 平年値は過去 10 年間の平均 )

- 4 予察情報の種類

病害虫防除・肥料検査センターから発表する情報は次の5つです。

- ( 1 ) 予 報・・・向こう1か月の発生状況を予測し、毎月25日前後に発表する。  
 ( 2 ) 注 意 報・・・主要な病害虫の多発生が予想され、かつ早めに防除が必要な場合に発表する。  
 ( 3 ) 警 報・・・主要な病害虫の大発生が予想され、かつ緊急に防除が必要な場に発表する。  
 ( 4 ) 特 殊 報・・・県内で初めて発生を認めた病害虫がある時や、病害虫の発生様相が特異な時に発表する。

( 5 ) 防除情報・・・注意をうながす必要がある病虫害の発生状況や、各種の防除技術  
指導情報について随時発表する。

### お知らせ

病虫害防除・肥料検査センターでは、ホームページで情報を提供しています。  
ホームページアドレスは、<http://www.jpnpn.ne.jp/miyazaki/>です。

#### 【問い合わせ先】

病虫害防除・肥料検査センター 生頼

TEL:0985-73-6670 FAX:0985-73-2127

E-mail : [byogaichu-hiryo@pref.miyazaki.lg.jp](mailto:byogaichu-hiryo@pref.miyazaki.lg.jp)